

京都大学	博士（地域研究）	氏名	須永 恵美子
論文題目	パキスタンにおけるイスラーム復興とウルドゥー語出版 —マウドゥーディーの著作と思想をめぐって—		
（論文内容の要旨） 本論文は、南アジア地域とイスラーム世界が交差するパキスタンを対象として、1947年に独立して以降のパキスタンにおいてイスラーム復興とウルドゥー語出版の発展がどのように連関しながら展開したかについて考察している。特に具体的な事例として、イスラームの理念を現代社会においていかに実践すべきかを平易なウルドゥー語で説いた思想家・著述家マウドゥーディーに焦点を当てている。 第Ⅰ部「パキスタンの成立」は、パキスタンをどのように捉えるべきかについて、理論的かつ歴史的な考察を加えている。 第1章では、従来のナショナリズム論や建国原理としての「ムスリム国民」論などを批判的に考察すると同時に、パキスタンをイスラーム国家とする言説のイデオロギー性を明らかにしている。 第2章では、南アジアにおける多言語状況を考察し、ウルドゥー語が「イスラミック・ランゲージ」として史的に発展したこと、バングラデシュ（かつての東パキスタン）の分離独立（1971）に至って、それまでの西パキスタンがウルドゥー語を共通語とする今日のパキスタンとして成立したことを明らかにしている。 第3章では、パキスタンの教育制度を概観した上で、パキスタンが学校教科書にどのようなものとして描かれているか、その歴史言説を分析している。 第Ⅱ部「出版とイスラーム復興」は、近代の南アジアにおけるプリントメディアの発展とそれがイスラーム復興にどのように貢献したかを考察している。 第4章では、南アジアにおける活字文化の歴史的な展開を概観し、新聞・雑誌などの発展を追うと共に、ウルドゥー語の出版が広がる様子を明らかにしている。 第5章では、イスラーム復興の進展と共に、前章で分析されたプリントメディアの中でタフスィール（聖典解釈学）が書かれ、普及する過程が検討されている。 第Ⅲ部「マウドゥーディーの思想と著作」は、イスラーム復興とウルドゥー語出版を担った最も重要な思想家と言えるサイイド・アブルアーラー・マウドゥーディー（1903-79）について、詳細な考察を展開している。 第6章では、思想家・政治家・著述家としてのマウドゥーディーを、時代背景、生涯、南アジア最大のイスラーム復興運動としてのジャマーアテ・イスラーミーの創設と活動、また他のイスラーム知識人との対比などを通じて描いている。 第7章では、マウドゥーディーの主要な著作群の中から、聖典解釈書である『イスラームの理解』を取り上げ、1942年の執筆開始から1973年の完成に至る執筆と出版の過程、発行部数や他言語への翻訳状況などを明らかにすると共に、マウドゥーディ			

一の執筆意図や叙述に見られる問題関心などについて具体例をあげて分析している。

結論では、パキスタンの特質をどのようなものとして捉えるか、ウルドゥー語出版がパキスタンの中でどのような役割を果たしてきたか、パキスタン内部においてイスラーム復興がいかに進展してきたかなどの問題設定に対して、ウルドゥー語が共通語として用いられる空間としてパキスタンが形成され、その中でイスラーム復興が進むことによってイスラーム社会としての内実が形成されてきたと総括されている。また、マウドゥーディーが平易なウルドゥー語でイスラームの理念を語ることで一般読者や聴衆に対して大きな影響力を持つと同時に、そのような過程を通じてイスラミック・ランゲージとしてのウルドゥー語が発展してきたと述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

パキスタンは南アジアではインドに次ぐ人口を持ち、イスラーム世界の中ではインドネシアに次ぐムスリム人口を持つ。さらに 21 世紀半ばには世界第 4 位の人口となり、ムスリム人口としてもインドネシアを凌いで第 1 位となると推計されている。そのような重要性にもかかわらず、南アジア地域研究においてもイスラーム世界研究においてもパキスタン研究は相対的に比重が軽く、十分な研究がおこなわれてこなかった。本論文は、そのような研究上の空白を埋める重要性を持っている。

本論文の功績は、以下の 5 点にまとめることができる。

第 1 は、パキスタンを静態的な実体としてではなく、動態的に変容する存在としてとらえた点である。従来のパキスタン研究においては、パキスタンが英領インドから印パ分離独立によって成立し、その建国原理がムスリムをヒンドゥー教徒と別なネイションとする「2 民族論」であったことから、パキスタンをイスラームによって成立したとみなす議論がもっぱらであった。そのような立論も、それを批判してパキスタンを世俗国家とみなす立論も、静態的にパキスタン国家を規定しようとする性格を持っている。それに対して本論文は、パキスタンがいかなる場として形成され、さらにそれがいかに変容してきたかという動態的な立場から分析を進めている。

第 2 は、ウルドゥー語を共通語とする文化圏としてパキスタンが次第に形成されたという点に着目し、それをプリントメディアとの関係で実証的に論じた点である。前近代の南アジアの多言語状況の中で、本来は一言語であったヒンドゥスターニー語が、イスラーム文化と結びつきアラビア文字で表記されるウルドゥー語と、ヒンドゥー教と結びつきデーヴァナーガリー文字で表記されるヒンディー語に分岐した。そのような歴史的経緯とその後の発展によってウルドゥー語が「イスラミック・ランゲージ」としての性格を帯びたという主張は、傾聴に値する。

さらに、これを論じる中で、先行研究がバングラデシュの分離独立（1971 年）以降の現在のパキスタンを 1947 年の時点にまで投射して論じる傾向が強いのにに対して、それを批判し、今日のパキスタンが 1947 年と 1971 年の 2 つの歴史的契機を経て成立したことを強調しているのは正鵠を得ている。バングラデシュの分離によって、ウルドゥー語を共通語とする言語圏が成立したことを強調する認識は優れている。

第 3 は、パキスタンの学校教科書において、イスラームやパキスタンがどのように描かれているかを実証的に検討した点である。外から見ればイスラームは西アジアから南アジアに伝播した宗教であるが、パキスタンではイスラームを自己に内在的なものとみなす歴史言説が広まっている。その実態を教科書の精緻な分析から描いた部分は、収集した素材とそれに対する分析の両方の点で高い意義を有する。

第 4 は、サイイド・アブルアーラー・マウドゥーディー（1903-79）という南アジアで最も重要なイスラーム思想家の 1 人を取り上げ、その著作、活動、思想などについて詳細に論じた点である。また、マウドゥーディーを 19 世紀以降の南アジアでのプリ

ントメディアの発展の流れに位置づけたことも大きな意義を有する。

第5は、マウドゥーディーの『クルアーンの理解』を、ウルドゥー語でもっとも広く読まれている聖典解釈書として取り上げ、それを詳細に論じた点にある。イスラームの聖典であるクルアーンには膨大な数の解釈書があり、近年は欧米でもその研究が進みつつあるが、日本ではまだ研究が遅れている上に、これまでもっぱらアラビア語の解釈書が研究対象とされてきた。本論文は、ウルドゥー語の解釈書を取り上げることによって、イスラーム学における聖典解釈の研究にも大きな貢献をしている。熟達したウルドゥー語の知見を縦横に用いるのみならず、アラビア語をも習得して、原典を活用していることも特筆に値する。

以上のように、本論文は南アジアとイスラーム世界が交差するパキスタンについて、地域研究の優れた貢献をなしている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年1月11日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。